

# ランドスケープの知恵とチカラで地域が蘇る

To Revive the Local Community through the Wisdom and Strengths of the Landscape

片山 博昭 *Hiroaki KATAYAMA*

京都市右京区役所副区長  
Director of the Ukyo Ward Office, Kyoto City



## 造園家はスーパーマン！

これからのランドスケープの仕事を考えるとき、思い出す言葉がある。今から37年前…私の大学2年生の時、今でも鮮明に記憶に残る授業があった。恩師である進士五十八先生も若かりし頃、造園学原論の授業であったが、百姓の意味について語られた。「百」は数多くの意、「姓」は仕事を表すとの意から、お百姓さんは、稲作や野菜づくりはもとより、農作業の為に、農道をつくり、水路をつくり、縄を編んで、時には石を積み、道具としての刃物をつくり、天気を読み…、今で言う農業、土木、大工、鍛冶屋、気象予報士まで、まさにスーパーマンである。「農」からの派生である造園は、自然や人を敬う気持ちを基本に、自然科学系の多くのことを学び、それを技術にして緑の空間を生み出すことだよ。私はいたく感銘を受けて、農学部で学んでいること、その中の造園領域を学んでいることに強く誇りを持ってた瞬間であった。心に残る教えは、地方自治体の造園技術者として、その後の私の仕事への姿勢を良好に規定している。

## 公園の再整備は地域を蘇らせる！

経年劣化などで老朽化が著しく魅力を失った公園…まさに「公園が遊んでいる」と揶揄される。

私が緑政課長の時代、京都市上京区の橘（たちばな）公園の再整備に取り組んだ。橘公園は、利用者を中心とした公園愛護協会があり、ボランティアによる美化活動がされるなど地域に溶け込んだ公園である。このため再整備のプランづくりには、住民参加型のワークショップを4回開催して丁寧な議論を積み重ねた。私自身、4回とも出しゃばって議論に参加した。

京都市の都心部にある最も古い橘公園は、周囲の町も少子高齢化が著しい状況にある。地域の公園のことを考え合うこと、語り合うことは、地域の子どものこと、地域のお年寄りのこと、地域の行事のこと、地域のこれからのことを考え合う絶好の機会となった。子どもらの野球ができる球技広場を！と保護者グループ、公園に隣接する住民は球技は禁止してほしい、お年寄りのゲートボールは球技じゃないのか！利害も様々で強烈に意見もぶつかり合う。真剣で、かつ、とても楽しい。

合意形成の技術は、今や、造園技術者の必須のスキルである。個々の想い、利害に基づく幅広い意見を集約して、そのデザイン（形）を示す。造園技術者には、人間力と造園領域にとどまらない幅広い知見、技術力が求められる時代なのである。橘公園は、世代を超えた多くの利用者で溢れ、利用者同士の笑顔の会話が弾む公園として蘇った。さらに、公園を核として地域が蘇りつつあると言っても過言ではない。社会資本としての公園緑地の重要性は認知されつつある。しかし、社会福祉関係費の急速な伸びにより、国も地方自治体も財政状況は大変に厳しい。市街地に公園を新設するには高額な用地買収費が必要となり、財政事情によりなかなか整備が進まないのが現状である。また、整備後50年を超える老朽化した公園も増えている。そこで、老朽化した公園のリニューアルと同時に、長期的視点で自治体財政事情の改善にも寄与し、新たな付加価値を生み出す「健康づくり公園」などの整備につなげていくことが肝要である。

## 街路樹の京都市型「二段階剪定」で紅葉景観が蘇る！

これも緑政課長時代の仕事であるが、紅葉する街路樹（イチョウ、トウカエデ他）を対象に、紅葉景観の実現と落ち葉の減量に向けた「二段階剪定」を平成23年度から本格実施をした。平成20年度までは、京都市も他都市と同様に、紅葉前の秋口に、基本剪定を実施していた。これは、街路樹の沿道の住民の方々の落ち葉への苦情や掃き掃除の負担の軽減が秋口の基本剪定実施の理由であった。しかし、景観・環境・観光に寄与する貴重な都市の文化資源である街路樹の育成管理のあり方として、また、生態への配慮の視点からも是正が必要であ



歩道部景観剪定後のイチョウ

るとの認識から、京都市型景観剪定（紅葉街路樹の二段階剪定）の制度を立案し、平成21年度から試行実施した。紅葉前（9～10月頃）に枝葉を半減させる一段階目の剪定を行い、紅葉後（年明け1～2月頃）に形を整える二段階目の剪定を実施している。

#### 【現段階での成果・効果】

- ①掃き掃除等への負担軽減の施策理解が進み、落ち葉に対する苦情が減少した。
- ②街路樹の四季の移ろいが感じられ、紅葉が美しいという声を多くいただいた。
- ③秋口の基本剪定よりも街路樹への負荷が減少、生態への悪影響は感じられない。

#### 【現段階での課題】

- ①軽剪定と基本剪定の組み合わせとなり、費用が約1.5倍増加する。
- ②二段階目の基本剪定は不要ではないかとの意見があり、市民の理解が必要である。
- ③観光地・住宅地・工業地等の立地特性に合わせた実施の検討が必要である。

京都市の特徴的な制度として市民参加での街路樹の育成が挙げられる。街路樹サポーター制度とは、「世界で最も美しい都市・京都」の実現を目指し市民の皆様と京都市が共に汗して、街路樹がすこやかに生育するよう、街路樹とその周辺部の美化や緑化に取り組んでいただく制度のことである。サポーターの活動内容は、①落ち葉清掃や除草など、街路樹とその周辺部の美化活動、②街路樹の病虫害等に関する京都市への情報提供、③京都市と協議の結果認められる場合は、植樹帯への草花の植栽や水やりなどの緑化活動の3点である。京都市は、清掃用具の支給や活動中の事故に備えたボランティア保険への加入などで活動を支援している。また、サポーターの美化活動で集めていただいた落ち葉を回収し、リサイクルして堆肥にしている。年間約3トンの落ち葉を堆肥化して、希望されるサポーターに配布している。街路樹サポーター制度は京都市独自の制度で、まさに、市民参加・共汗による街路樹育成を推進するものであり、現在、98団体約1,900名（平成28年6月末現在）が登録されている。京都の良い風習である向こう三軒・両隣の打ち水や門掃きの伝統、市民のチカラが活かされている。京都市の政策、京都の造園界が培った「御所透かし」という剪定技術、沿道市民の参画という総合的なランドスケープのチカラで街の景観が蘇る好例である。

#### 自然資源を活用した地域おこし！

造園技術職員でありながら、4年前から総合行政の責任者として、中山間地域の活性化の現職にある。赴任地の京北（けいほく）は清流・桂川の最上流域に位置する自然性・歴史性が豊かな地域である。写真（出逢い桜）は管内にある京都府下随一の大きさを誇るシダレザクラである。京北の春、常照

皇寺、福德寺、宝泉寺はもとより、山・里・川には、様々な種類のサクラが咲き、それらは様々な表情で美しさを放って私の目に映えている。京北のサクラは京都の市街地のサクラの開花から約10日ほど遅れて開花するが、これは「もうひとつの京都観光」の対象となりうる資源として大きな可能性を秘めていると感じた。京北の先人らが守り育てた山や里の美しいサクラは、もっと多くの人々に知っていただき、観に来ていただき、住民の皆様とともに育てていきたい観光資源である。そこで、京都大学名誉教授の森本幸裕先生に桜100選の選考委員会委員長をお願いして、住民の皆さん自身に次代に残したいわが町の美しいサクラを推薦していただいた。広報が行き届き、公募段階から住民の関心が高まり、京都造園建設業協会（写真：専門家調査）の社会貢献事業で、個人ごとの樹勢調査、委員会での丁寧な議論を経て、並木や群を含め、42か所400本のサクラを選定した。住民にとって、身近なサクラが京大の先生らに評価されたと、取組を通して、地域の誇りを取り戻す効果があった。この桜100選のパフレットは、京北地域の観光PRに、また、活性化に寄与しており、春の観光客数が大きく伸びた。まさに、地域の内発的発展、自然資源を生かした地域おこしになったと言える。



京北弓削に咲く出逢い桜



桜100選専門家調査

#### これからのランドスケープの仕事

庭園や公園緑地のデザインにとどまらず、景観デザイン、地域デザイン、暮らしのデザインなど、造園家の領域、活躍の場は幅広いと考える。国是である地方創生、中山間地域の振興プロジェクトにも造園家のチカラが必要である。自らの造園領域を決して矮小化することなくチャレンジすべきと考える。スキルは経験を重ねて身につけるものであり、「今」で諦めるべきでない。自然と人を敬い、自然科学系の技術で社会に貢献するのが造園家に課せられた普遍的な使命である。

#### <略歴>

佐賀県伊万里市生まれ。1982年東京農業大学卒業、同年、京都市役所に造園技術職員として奉職。西京極総合運動公園、宝ヶ池公園、梅小路公園の計画・設計。全国都市緑化きょうとフェアの会場計画・展示計画の企画立案。地域コミュニティ支援業務、総合計画の右京区基本計画策定。新たな「京都市緑の基本計画」策定。日本造園修景協会京都府支部支部長、技術士【建設：都市及び地方計画】。